

シ・バハマ

脚本／北島 淳

原作／古典落語「芝浜」



とき

現代、またはそれに準ずる時間

ところ

一輪の花が咲く浜辺

ひと

男

女

娘

花

太陽

警官

〔注〕・傍線を引いている部分は、本来発話すべき役のために用意された台詞だが、花が盗む部分として指定しているところ。

・台詞の段組みが二段組みとなっている箇所は同時に進行することを想定している。

◎ 浜の情景（ただし、具体的に浜を示すものはあってもなくてもかまわない）
そこに、女と娘の生活に必要なものが一式収まっている奇妙なベンチがある
種々の花が天井から、あるいは舞台の床からひとところに向かって伸びている

【開演前】

開演より前に花役の俳優が担当スタッフとともに出てくる

担当スタッフは俳優と花をつないで固定し、俳優を花に仕立てる作業を行う
（あくまで開演前なので、これ以外に制約はない）

作業完了後、担当スタッフによる確認が行われる

花が完成したことを確認した担当スタッフは、俳優に対して発声を促す

【一幕】

花
（大きく）シ！

花はどうにも満足する声が出なかったようだ

担当スタッフは花の発声を確認するや、その場を立ち去る

花
…シ！…………シ！……

担当スタッフの退出とともに、花を残してすべての照明は灯を落とす

花
…シ！…………シ！…………シ！

花はどうやら得心する声が出せたようで、満足げな表情を見せる

花
バハマ！

波の音が一度、聞こえる
少しの沈黙

花
…………（呼吸を整え）ハマ…。

波の音が二度、聞こえる
いつの間にか女がベンチに座り、ヘーゲルを読んでいる

花 まだ明けそうにない夜の真ん中、浜に………いる？………（何度かうなずき）いる。

女 誰が？

花 暗闇っていうのは、ない、ってことだ。そう考えることにためらいはない。私はまだ明けそうにない夜の真ん中で、両脇をしつかと闇に抱えられて浜に………いる………たじろぐ………こともなく。耳を澄ますまでもない、聞こえてくるのは

波の音が間断なく聞こえるようになる

太陽が現れて、朝日の上がる方向へと歩いていく

花 （次第に早口に）やがて空が白み、そして海の色を明らかにする。前を見れば青く、後ろはやつぱり暗くて怖いから見ない。私を赦そうとする仄暗さの中で、引いては寄せてまた碎かれる波のしぶきと、松原のやたら大きな影だけがくつきりと見える。

太陽 おはようございます。太陽です。………そう、僕の挨拶はほとんど例外なく「おはようございます」なんです。なにしろ、1日のうちで僕が最初に目にする風景のそこは、すべからず朝なんですから。

花 （次第に早口に）やがて空が白み、そして海の色を明らかにする。前を見れば青く、後ろはやつぱり暗くて怖いから見ない。私を赦そうとする仄暗さの中で、引いては寄せてまた碎かれる波のしぶきと、松原のやたら大きな影だけがくつきりと見える。

太陽 おはようございます。太陽です。………そう、僕の挨拶はほとんど例外なく「おはようございます」なんです。なにしろ、1日のうちで僕が最初に目にする風景のそこは、すべからず朝なんですから。

女は煙草を取り出し、口にくわえる

花 太陽はのべつ幕なしに光を振りまいちまうから隈がない。隈、っていうのはつまり影のことだ。けれど、そんな太陽だって思わず隈を作ってしまうことが1日のうちに2回ある。………ひとは朝日だ。実際のところ、それは上がりきるちょうど手前が一番明るい。すうっ、………と白けて………

太陽 さて、ここで皆さんに太陽からひとつお願いがあります。起き抜けにカーテンを開け広げ、日の光を浴びて伸びをする、なんてことはただちにやめていただきたい。あなたはさわやかで気持ちが良いかもしれないが、寝起きのすっぴんを見せつけられる、こちらの身にだってなっていたきたい。

花 太陽はのべつ幕なしに光を振りまいちまうから隈がない。隈、っていうのはつまり影のことだ。けれど、そんな太陽だって思わず隈を作ってしまうことが1日のうちに2回ある。………ひとは朝日だ。実際のところ、それは上がりきるちょうど手前が一番明るい。すうっ、………と白けて………

太陽 さて、ここで皆さんに太陽からひとつお願いがあります。起き抜けにカーテンを開け広げ、日の光を浴びて伸びをする、なんてことはただちにやめていただきたい。あなたはさわやかで気持ちが良いかもしれないが、寝起きのすっぴんを見せつけられる、こちらの身にだってなっていたきたい。

息が切れたらしい花はおおげさに息を吸い直す

女はライターで煙草に火をつける

花 そのあとひよっこり顔を出す！

一気にまくし立てた花は息を切らしている
次第に波の音が小さくなり、溶明

朝

女はベンチに座り、煙草をふかしながら夢中でヘーゲルを読んでいる
女は頭にピーヒャラ（吹きもどし）が付いたご機嫌なカチューシャ姿である
（この限りでなくともかまわない）

浜には花が一輪咲いている

そうした浜の風景を朝日の位置から太陽が照らしている

浜にそよぐ風が二度、花を撫でてゆらす

花
（風が吹く度に小さく）そよそよそよ……

大きな風が吹く

女は風を嫌がり、煙草を消してさらにヘーゲルに熱中する

花
（大きく風に当たり）そよそよそよ……

男が何かを探す様子でいそいそと現れる

男
ない……ない……ない……ない……

男はあたりを一回りして、そのまま出て行ってしまふ

男が花のそばを通るとき、花は「そよそよ……」と少し風にそよいで傾く
間

女は男が出て行った方向を見やっている

花
（元の体勢に戻りながら）そよそよそよ。

女
（再びヘーゲルにかぶりつく）

太陽
おや、珍しい。お客さんですか？

花
…おう、久しぶりだね。

太陽
ここんとこずつと天気悪かったですからね…どうです、光合成してますか？

花
（意に介さず）んー、誰だろね？

太陽
もしもーし。

男が再びぶつぶつと言いながら現れる

しかし、もはや何かを探している様子でもない

男
ない……ない……ない……ない……

男はあたりを一回りして、今度は花のすぐ後ろで立ち止まり、がっくりと肩を落とす
女は読みかけのヘーゲルをベンチに置き、男を注意深く観察している
花も、男の方を探っているがどうにも位置が悪く見えないようだ

花 …ね、あんただれ

男 (深いため息をつく)

花 そよそよそよ……おお、びっくりした。(ちいさく、戻りながら) そよそよそよ……

男 (右側を見て) ……ない。(左側を見て) ……ない。(海側を向いて) ……ない。……

(少しの心構えのあと、女の方を振り向きながら) な…

男が振り向いた時、女は頭のピーヒャラを思いつきり伸ばしている
その様子を見た男は女を諦め、花のところへと向かう

男 あの、すみませんが。

女 ちよつと。

花 なあに？

男 ここいらで、お財布を見かけませんでしたか？ お金の入った…

女 (強く) なぜ？

花 …いえ、知りません

男 (ため息をつく)

花 けれどそよそよそよ…おーい。

男 (女の方を見て) 何です？

女 あなた、何をされてるんです？

男 ええ。財布を探しています。

女 あなたは、それが何だかわかりますか？

花 何

男 って、ご覧のとおりのお花ですよ。

太陽 (花に対して) ん？

女 だったら、どうしてそんなことするんです？

男 だから、いったい何です？

女 だって、今あなた

花 お財布を探している

女 っておっしゃいましたね？

男 ええ、申し上げました。

女 さらに、あなたが話しかけているのは

花 ご覧のとおりのお花

女 だともおっしゃった。

男 それがどうだって言うんです？

太陽 あ、そういうこと。

女 であれば、ここにれっきとした私という者があって、どうしてそんなお花になんか聞くんです？

男 私の勝手じゃありませんか。私が、どれに何に聞いたって……なかんずく、あなたに何を聞かなくなつたって

女 私を馬鹿にしてるんでしょう。

男 ……は？

女 あなたは、私のことを

花 (太陽に向かつて) 馬鹿だ！

女 っと思つてらっしゃるんです。

太陽 違うよ。

男 どうしてそうなるんです？

女 見ていたんですから。あなたが、

花 ない、ない…

女 っでこれ見よがしにつぶやきながらあたりをたむろつて、その後はつきりと聞こえるように大きなため息までおつきになった。にもかかわらず、あなたは私と目が合った途端に踵を返して……私、見たんですから。

男 どうやら誤解があるようだ。私は何もあなたをそのようには思っておりませんし、そもそも私はこう見えて自分のことを

花 理解の深い男だ

男 と自負しています。ですから、あなたが個人的な趣味でその…頭にピロピロしたものをつけていたり、よしんばそれを伸ばしていたからと言って、私は決して差別などしない。

女 別に好きじゃありませんよこんなもの。(カチューシャを投げ捨てる)

男 ええ…？

間

女 私のこと、馬鹿にしてらしたんでしょう？

男 ……それは、

女 あなた、少し決めつけが過ぎます。

男 ……すみません。

花 馬鹿だ

女 とか

花 趣味だ

女 とか

花 なん

女 とか

花 カーン

女 とか……よくありませんよ、決めつ

太陽 おお。（拍手を送る）

けというのは。あなた、一度ヘーゲル

花 （サムアップして応える）

でも読まれたらいかがです？

太陽 お見事です。

男 …ヘーゲル……とは何です？

女 あなた、ヘーゲルさん知らないんですか？

男 ええと……お知り合いでしょうか、あなたの。

女 （本を取り上げて）

花 ヘーゲルさん

女 というのは、この本をお書きになった立派な方です。

男 本？

女 ヘーゲルさんさえ読めば、あなたの勝手な決めつけがいかに世界の何もつまびらかにしないかを明らかにしてくれます。（ページをめくりながら）いいですか、つまり……、

男 いえ、大丈夫です。

女 …え？

男 ……ええ、たしかにあなたとその……ナントカゲルさん

女 ヘーゲルさん。

花 ヘーゲルさん

男 のおっしゃるとおりです。たしかに私は少し、決めつけが過ぎていたようです。

女 ……わかっていただけました？

男 ええ、わかりました。
女 じゃあ、お伺いしましょう。
男 ……え？
女 あなた、今
花 わかりました
女 って決めつけをお捨てになった。それなら、私に聞きたいことがあるんじゃない？
男 ……しかし……よろしいですか？
女 私、そんなお花なんかよりは、ずっと有意義なお答えを差し上げることができると思うんです。
男 ……なるほど。それでは、
女 張り切ってください。
男 太陽 まあまあ、どうぞ落ち着いて。
女 ええ、あのー…。ここいらで、お財布を見かけませんでしたか？
男 （最初はとぼけて、次第に乗り気に）…お財布？…どんなお財布かしら。
女 ええ、お金の入った。
男 それはそうでしょう。
女 黒い、革財布なんです。
男 黒い…革の…お財布？
女 そうなんです。どこかで落としてしまったらしくて。
男 まあ、お気の毒に…。いったいつ頃なくされたんです？
女 ええ、昨日の夕方まで持っていたのは確かなんです。
男 おいくら、入っていたんです？
女 それが、驚かないでくださいね。
男 ええ。
女 なんと、42万円も入っていたんです。
女 （いっさい驚かずにただうなづく）
男 ……あ、あの…42万円分くらいは驚いていただいても結構です。
女 ……（ひどい演技で）まあ…そんなに？
男 ありがとうございます。
女 いえいえ。
男 つまり、これはなけなしの全財産なんです。だから私、必死なんです。
女 よくわかります。（再び強く同調しだす）

男 わかっていただけですか。いやあ、嬉しいな。…ああ、先ほどは勝手をして申し訳ありません。

女 勝手？

男 ええ、本当に失礼な決めつけをしてしまった。私、今だから申しますが、実は先ほどあなたがその…頭のピロピロをビヨーンとしていたときにですね、

女 ええ。

花 あ、これはまずい人に出会ってしまった。

男 そう思っただけです。

女 まあ。

男 では、あらためてお伺いを差し上げます。

女 はい。

男 つまり…見ませんでしたか？ 私が落としたお財布を…そう、革でできた黒色の、42万円が入ったやつを。

女 知りません。

男 ……………え？

女 え？

男 今、…なんと？

花 知りません

女 そう言いました。

男 ……………なるほど。

女 残念でした。

花 (こらえきれずに笑っている)

男 はあ、あの…心当たりなんかも？

女 ありません。

男 ありませんよね。

女 よかったですわね。

男 何が？

女 あなたは今、一歩あなたのお財布のありかに近づくことができましたから。

男 ……どうして？

女 少なくとも私は、あなたのお財布なんて、少しも知りません。これが一歩。

男 ……ええ、なんだかむしろ遠のいたような気がします、一歩分。

女 (ハッと) そもそもあなた、…本当にお財布なんて持ってたのかしら？

男 …持っていますよ。どうしてそんなことおっしゃるんです。

女 だって、持ってませんよ。そうでしょう？

男 いや、持っていないかもしれませんが、現に今、探してるんですから……持っていたんです。

女 不自然じゃありません？ 失礼ですけど、あなたのような風采の上がない方のお財布に42万円も、っていうのは少し…無理があるように思うんですけど。

男 だからさつき

花 全財産だ

男 と申し上げたんです。とにかく、持っていたものは持っていたんです。

女 本当に決めつけの多い方。ねえ、この浜は良いところですよ。もうそんな、あるかないかもわからないお財布なんて諦めてみてはいかがです？

男 冗談じゃありませんよ。ようやくお日様が上がって…これからやっとお財布を探せるようになったっていうのに。

女 あなた、夢でも見てらっしゃったんじゃないかもしれません？

男 何ですって？

太陽 そうなんですよね。

女 そもそもそんな大金、持ってなかった。

花 なあに？

女 た。あなたの希望とか願望とかそんな

太陽 僕、太陽なんですよね。

女 ものが一緒くたになって、持ってもいない大金を落としてしまったという夢

花 知ってる……あ、おはよう。

女 でも見たんじゃないかしら。

太陽 いや、そこなんですよ。

男 ですから、そんなことはありません。

花 ……何が？

女 わからない方。いっそ夢でも見ていたことにして、そう決めつけてしまう方がよほどあなたのためになろうかと

太陽 たしかに今はあなたにとっては朝なんです。……どうです、光合成しますか？

男 それこそ余計なお世話です。探せば

花 (舌打ち)

女 見つかるかもしれませんし、それで見

太陽 あ、すみません。そうではなくって。

女 つかるのが一番うまく収まる話じゃありませんか。

花 だから何が？

女 もう結構です。あなたがどうしても

太陽 つまり、そこは朝なんでしょうけれど、僕の下はそう、昼なんです。

女 探したいっておっしゃるんですしたら、

花 ……床じゃない。

女 どうぞ気が済むまでご自由になさった

太陽 あ、そうなんですけどそうじゃなくって。

男 言われなくとも探しますよ。何しろ、

花

男 私の大切なお財布なんですから。

花 (台詞を盗み損ねたことに気づき) あ。

女 …でも、どうしても見つからないと
きには、こちらに戻っていらつしやつ
てもかまいませんよ。だって、この浜
はとても良いところなんですから。

男 ない……ない……ない……ない……

太陽 ……ああ。

花 (太陽をにらみつけている)

太陽 いや、………あの…

男は女の言葉を待つことなくぶつぶつと、一回りしながら出ていってしまふ

女 ……おかしな方。(再びヘーゲルを読みだす)

花 (すっかりふくれている)

太陽 いや、別に……邪魔をするつもりはなかったんです。

花 (そっぽを向く)

太陽 ああ……その、……ごめんなさい。

花 (ゆっくりと小さく4回、頭を揺らす)

太陽 え、何？

花 (続けて4回、次第に大きく頭を揺らす)

太陽 まさか、

花 (揺らし続けながら) ふん……ふん……ふん……ふん……

太陽 あ、やめなさい。花粉はやめなさい。

花 (かまわず) ふん……ふん……ふん……ふん……

太陽 だからおやめなさい。僕はあらゆるタイプの花粉に反応するアレルギーがあつて……あ、くしゃみが……くしゃみが、

花 ふん。

太陽 へつくし。

花 へつくし。

太陽 花粉がふんふん。

花 花粉がふんふん。

太陽 へつくし。

女 おかしいわね。もう夜明けからしばらくなのに、太陽はまだあんな低いところにあるものかしら…。

娘が小さな脚立を持って太陽のもとへと向かっている
※ 太陽がくしゃんでいる間から出ていて差し支えない

太陽 ……（背伸びをして）はい。

女 あら、…やっぱり気のせいかしら。

花 （手の上の花粉を息で太陽の方へと吹きかける）

太陽 へっくし。

女 あれ？

太陽 （背伸びをして）はい、失礼しました。

女 まあ、よかった。（ヘーゲルに目を落とす）

花 ばーか。…あれ、さっきの人は？

太陽 あ、なんか向こうの方で財布探してます。

花 見えるんだ？

太陽 そうですね。日なたのところにいれればいい。

花 便利。

娘 おーい。（太陽を叩いて呼ぶ）

太陽 え？

花 おう。

娘 これ、どうぞ。（脚立を差し出す）

太陽 やや、これはこれはどうも。いつもすみませんね。

太陽は脚立を受け取り、床に置いてそのまま高く上がろうとする
突然、娘は太陽の横っ面をしたたかに殴りつける

太陽 痛い！

花 素敵。

太陽 え、何するんですか？

娘 （じつと手を見ている）…熱い。

太陽 …ええ、だって僕、太陽ですから

娘 （殴る）

太陽 痛い！

娘 ……熱い。

太陽 だから、太陽ですから。

娘 (殴る)

太陽 痛い！

娘 ……熱い。

太陽 太陽ですからね。

娘と太陽はしばらくこのやり取りを繰り返している
そんな中に、男がとぼとぼとした足取りで浜へと戻ってくる

男 なかった……なかった……なかった…… (花の後ろで立ち止まる)

花 あれ、帰ってきた

男 (ため息をつく)

花 そよそよそよおーい…

女 あら、あなたお財布は？

男 ええ、どうにも見つけることができ

なくって…

女 でも、ずいぶんお早いお戻りね。

男 いえ、実はですね。

女 ええ。

男 さっきまで夜だったので、そもそも
どこを歩いていたのかさえ皆目わから
なくって…どこをどう探したものかと。

女 ほら、言わんこっちゃない。

男 いや、しかしです……え？

娘と太陽は勢い余ってそのまま抱き合う
しかし、太陽はとっても熱いのだ

娘 あつい…。 (太陽にしなだれかかってそのまま倒れる)

太陽 ……うん、太陽ですから。

花 大丈夫？

娘 んー、…平気。(ゆっくりと立ち上がる)

太陽 (何度かの繰り返しの後に) 熱い！

娘 ……痛い！

太陽 太陽ですから……え？

娘 ……イタイ？

太陽 ……アツ

娘 (殴る)

太陽 熱い！

娘 痛い！

太陽 熱い！

娘・太陽 (感動して) おおおおおお……

男 …あの、あちらは？
女 娘です。
男 え？
女 私の。
男 …はあ、なるほど。
娘 （男に気づき）あれ？
男 ああ、これはこれはどうも。初めまして。
娘 ……（理解せず）ハジメマシテ？ ……はじめました。
男 …ええ。
女 ま、娘と言いましても、白血病で亡
女 くなった親友の義理の妹のお嬢さんを
男 養子に迎えただけですの、血のつな
男 がりはないんですけれど。
男 …複雑ですね。
女 あ、嘘ですけれど。
男 どうしてそんな嘘をつくんです。
娘 ご用事ですか？
男 いえ、私は別に何も。
娘 ふーん。
男 いや、そうだ。あなた。
娘 はい。
男 あの、お財布を見ませんでしたか？ ……黒い、革財布なんです。
女 こちらの方、どうも
花 お財布を落としてしまった
女 とか、嘘とも本当でもないともつか
娘 （花に気づいて）おろ？
ないことを主張されていて、しかも
花 それを探している
女 とか
花 なん
女 とか
男 本当です。あの、あなたちょっと黙
娘 やっほー。
っててください。

花
(娘に応えている)

女
はい。

男
それであなた。

娘
はい。

男
どこかで見ませんでしたか？ 私の、

娘
革の？

男
そう。

娘
お財布？

男
そうです。

娘
どす黒い。

男
いえ、普通の黒なんですけれども、

娘
見ませんでした？

男
……… (自分を示して) え？

娘
(うなづく)

男
…だつて…探してるんですから、私が。

娘
見ませんでした？

男
ええ、ですから…見ませんでした。

娘
じゃ、見ませんでした。

男
はい？

娘
見ませんでした？

男
だから、見ませんでした。

娘
じゃ、見ませんでした。

男
いえいえいえ、そうではなく。私が聞いてるんです。つまり、あなたが、私のお財布を見
ませんでしたか、ということ。…わかりますか？

娘
……あなたが？

男
そう。

男・娘
(互いに) 見ませんでした？

男
たしかに私は見ていませんが、

娘
じゃ、見ませんでした。

男
あれ、どうして伝わないんだろう？ ……ええ、たしかにあなたにとって「あなた」は私なん
ですが、私にとっての「あなた」は、あなたなんです。… (強く) つまりわかりますか？

娘
(不機嫌に) あ？

男 ああ、すみません。つい言葉を荒げてしまった。

娘 （地団太を踏んでいる）んー。

男 わかりました。あの…あの、じゃあひとつずつ整理をしてまいりましょう。

娘 うん。

男 でしたら…まずはあなたの立場に立って考えてみましょう。（自分を指して）これは……

その、（娘を指して）そちらにとって…？

娘 ……あなた。

男 そう。あなたなんです。

娘 （喜んでいる）

男 では……そちらにとって、そちらは……すなわち、私、にはなりはしないでしょうか？

娘 （理解できていない）

男 うーん、つまり……あなたにとって私は、

男・娘 あなた。

男 そして、あなたにとって……あなたは？

娘 ……（男を指して）あなたと……（自分に意識が向かう）

男 そう、そうです。

女 （いつの間にか懷からタワシを出している）

娘 （女につられて）タワシ？

男 ……あなたね。

女 何か？

娘 （うれしそうに）亀の子タワシ。

女 ちゃんと黙ってましたよ、私。

男 え？

花 黙っててください。

女 あなた、そうおっしゃったから。

男 いいでしょう。じゃあ……（自らを指して）あなたと……（タワシを指して）タワシと……

女 （懷から2つ目のタワシを出す）

娘 タワシ？

男 ……ええ？

女 （男を指して）あなたと……（タワシを指して）タワシと……（もうひとつのタワシを指して）タワシと……

突然、空から大量のタワシが浜の一角に降り注ぐ

娘

タワシタワシタワシタワシ……

男

ええー？

女

(持っていたタワシをタワシが降り注ぐ方向に投げ込む) えい。

娘

タワシだらけ！

娘はタワシを追いかけて飛び込み、その後、勝手にタワシで遊びだす

女

あなた、あんまり余計なことを言わないでください。

男

どうしてタワシが？

女

海の天気は変わりやすいですからね。タワシが降ることだってそりやあるでしょう。

男

ごまかさないでください。あの子は何です？

女

まあ、

花

あの子だ

女

なんて、自分の娘でもないくせに。

男

ですから、

花

(激しく) ごまかさないで

男

って言ってますでしょう。

女

先ほどからそんな気色ばんで、何を

男

おっしゃりたいんです？

女

ですから……どうしてタワシなんか出すんです？

女

私、あの子を「私」だなんて言わない子に育てたいんです。

男

……何ですって？

女

自分のことを「私」だなんて言葉で棚に上げて、何か特別なものに仕立て上げようとするようなことをあの子にしてほしくない。そういうことです。

男

……どうしてそんなことを？

女

私、こう思うんです。私たちは、少し「私」という容れものに囚われすぎてやしませんで

男

しょうか？

女

どういうことです。私たちは、少し「私」という容れものに囚われすぎてやしませんで
つまり人は、自分には確固たる「私」なんてものがあると思いついてしまふからこそ、例
えばその意に反した何かが起こったとして、そういう時にかえって不自由になってしまう。

ですから私、あの子に「私」なんて言葉を与えないんです。
するとどうなるって言うんです？

とてもやさしい心を持つことができるようになると思うんです。たとえば人が痛みを感じたとき、同じように自らも痛むように。

男 それ、成功してます？ 太陽 あの人が一番自分のこと「私」って

女 なぁに？ 言ってますん？

男 私、先ほど娘さんに少しも話を通じ 花 ……そうかしら？

ずにほとほと困り果てていたんですが。 太陽 ええ、たぶんですけど。

女 じゃあ、あなた困ってなかったんじゃないやありません？

男 困ってましたよ。

女 本当は落としてなんかないんでしょう？ お財布。

男 落としたんです。42万円。

女 じゃあ、これからまた探すんですか？

男 ……いや、しかしどこをどう探したもののか。

女 この際あなたが本当にお財布を落としたのかはさておいて、また探すにしても、だったら一度お宅にでも戻られたらいかがです？

男 ……いや、それは、

女 あきらめの悪い方。

男 いえ、そうではなく。

女 え？

男 帰るところが、ないんです。

女 ……何ですって？

男 ええ、ですから私には

花 (ポツリと) 帰るところがない (この後、次第にふさぎ込んでいく)
男 んです。

女 だってあなた、現に今いらっしゃったじゃありませんか。それなのに、どうして帰ることができないんです？

男 ええ、それはおっしゃるとおりなんですが。

女 ええ。

男 実は…つい先日、妻と別れまして。

女 ……まあ。

男 まだ、正式に籍を抜いたわけではありませんが。
 女 だから、帰るところがない、と。
 男 私、少し前に仕事をクビになってしまいました。
 女 お仕事？
 男 しばらくは貯金を切り崩しながらやりくりをしていたんですが、それもうにも立ちいなくなつて……ついに家を追い出されてしまいました。
 女 ちょっと待ってください。でしたら、どうしてその、42万円だなんていそうなお金を持ち歩くことができるんです？
 男 ですから
 花 (明るく) 全財産だ！
 男 だって申し上げたんです。結局、貯金も底をついてしまいましたから、持っていた免許証を担保に50万円を借り上げて、残っていたのが42万円だったんです。
 女 ……あ、そう。
 男 しかし、もうこうなつてしまつては警察くらいしか頼るところはありませんし。
 女 だめですよ、そんなの。
 男 もちろん、そんなことで見つかるとは思っていません。しかし……万が一ということだつてあるかもしれませんから、届出だけでも、
 女 そうではありません。
 男 ……何です？
 女 あなた、いくらのお金を落としたんですって？
 男 ですから……42万円です。
 女 つまり、ただか42万円を探してもらつたために、警察の方をお願いをするんですか？
 花 (活力なく) たつただかー
 男 じゃありません。これがどんなに大事なお金か知りもしないで。
 女 知つてますよ。今、おっしゃったんですから。
 男 だったらわかつていただけるでしょう。なけなしでも、私にとっては大事な42万円です。
 女 誰もあなたにとつての価値なんか問題にしちゃいないんです。
 男 あなた、さつきから何が言いたいんです？

太陽 (台詞を盗まないことに気づき) あれ？……どうしました？
 花 ……私も、帰るところがない。
 太陽 まあ、根っこありますしね。
 花 どうせ私は、寄る辺のない根無し草……花？……あれ、この場合、私、花かしら？ 草かしら？
 太陽 悩みが続かないタイプで何よりです。

女 税金は払っていますか？

男 ……………は？

女 あなた、税金はお納めになっておられますか？

男 ……いえ、今は職についてないので。

花 （小さく）ね、税金ってなに？

女 つまり、税金は？

太陽 カツアゲみたいなものです。

男 だから、払っていません。

花 ……ふーん。

女 日本における警察官の平均給与は年収でおおよそ750万円。ボーナスがざっくり4か月分とすれば、月給は47万円程度となります。ご存知でしたか？

男 はい？

女 もちろん、その中からあなたと違って税金やら社会保障やらを立派かつ強制的に支払っていますので、手取りはもっと少ないでしょう。

男 それがどうしたって言うんです？

女 ですから、あなたのたった42万円のお財布を探すために、47万円の警察官に働いていただこうってあなたの魂胆が卑しいものだと申しているんです。

男 卑しいですって？

女 警察官の方の給料っていうのは、あなた以外の税金を払っている沢山の方によって支えられてるんです。

太陽 （花に）あれ、いいの？

花 ん、飽きた。

男 わかってますよ。そんなこと。

女 いいえ、わかっていないんです。少なくとも肝心なところはちつとも。例えば、たくさん税金を納めてらっしゃるお金持ちのヒゲのおじいさんがもしお金を落としたってことなら、たとえそれが100円だとしても警察の方が探すのは妥当なことかもしれません。だって、税金を払ってらっしゃるんですから。しかし、もしあなたのような税金を払わない方のお財布を探すために、ヒゲの100円を探せなかったりすることがあればどうでしょうか？それに、落とし物とはいえ警察官の方が見つけたんでしたらお札の1割だって当然ありません。それなのに、1銭も出さないあなたのお財布について、これを警察に探してくださいってお願いは、これは相当に筋が悪いお話ですよ。

男 あんまりだ。

女 あんまりじゃありません。とにかく私は、あなたなんかのために税金なんか払いたくはないんですから。

男 ……うう。

女 そりゃ、あなたにとってはそのお財布は、命を懸けた大事なものかもしれませんが、広くものごとを捉えてみれば、あなたの42万円なんて、世界にとってこれっぽっちの意味も価値もありません。

男 ……すみません。

女 まったく…払うものも払わずに権利ばかり主張して。あなた、今後は道路を歩くときには申し訳なさそうに端っこのほうを歩けばいいんです。

男 ええ？

花 (突然会話に参加して) でも、私だったら探すわ。

少しの沈黙

太陽 ……え？

男 え？

花 (男に) だって、1割もらえるのよね…42万円の1割だから、…4万2千円。もし2時間くらいで探すことができたとすれば、時給は2万1千円。たとえ3時間だったとしても……

女はいつの間にか立ち上がり、何かを考えこんでいる

男 …………… (女の様子に気づき) え？

女 今夜は焼肉よ。

娘 肉？

太陽 焼肉？

花 パーティー。

女、娘、太陽が口々に「ない……ない……」と言いながら一斉に財布を探し出す
花も同様に探そうとするも、花であるから(固定されているから)動けない

男 まずい。ない……ない……

男もつられるように慌てて再び財布を探し出す

大騒乱(※ 騒動中はどうぞ自由に)

女 (海の方に向かって) お客様の中に、42万円をお持ちの方はいらっしゃいませんか？…
42万円を現金でお持ち歩きの方はいらっしゃいませんか？

男 落ちていてください。そっちは海です。海に何を聞いてるんです。

女 この貧乏人が。(踵を返して探しに戻る)

男 あなた、なんてことを言うんです。

女 (娘に) いいですか。服の中までくまなく探すんですよ。

娘 はい。

男 そうか、服の中か。

太陽 (見つからずに焦れて) ぬあああああ……

太陽はその場から逃げ出して姿が見えなくなる

あたりは急激に真っ暗になる(以下、暗闇の中で声が響く)

娘 真っ暗。

女 ちょっと太陽さん。戻っていらつしやい。あなたがいないとあるものだって探せやしない。

太陽 (遠くで) 何ですって？

女 ですから、あなたがいなくなってしまうと光がないんです。

太陽 あなたこそ、さつきライター持ってたじゃありませんか。

女 ライターなんかでどうにかなるものですか。いいから、とにかく戻っていらつしやい。

太陽 はいはい。ちょっとお待ちください。

娘 ふおおお…なんじゃコイツ。

太陽 お待たせしました！。

太陽が戻ってくるや、あたりは再び光に包まれる

男は財布を探して服の中を探した結果、下着姿でさらに服を検めている

娘はフライパンのような形をした原子爆弾を拾ってひっくり返っている

一同は思い思いに、しかし一心不乱に財布を探し続けている

しかし、花だけはすっかりくじけてしまつて花占いを始めている

花 見つかる…見つからない…見つかる…見つからない……

花はついに泣き出してしまふ

娘はいち早く花の異変に気づき、慰めだす

太陽も状況に気づき、女に知らせてともに探す手を止める

太陽はいるべき場所へと戻り、女は遅れて花に寄り添う

一方、男はもはやパンツ一丁になつても、必至に探し続けている

男

(パンツを覗き込んで) 上から見ても……ない。(体をさかさまにしてパンツを覗き込み)
下から見ても……ない。もう、どこ見てもないじゃないの。……あれ？

男は力尽きたところで周囲の状況に気づき、おそろおそろ立ち上がる

男 …あの、これは……どうしたことでしょう？

花 （残った花をむしりながら）私……お財布を探したかったの。

男 …ええ、そうでしょう。

女 いいのよ。無理して喋らなくったって。

花 でも私……動けないの。

男 ………当たり前じゃないですか。

女 いいのよ。無理して動かなくったって。

男 無理すると枯れちゃいますよ。花なんですから。

花 どうして私には根っこなんか生えてるのかしら。 （花をちぎっては投げる）

男 何を言ってるんです？

娘 （ハンカチを差し出して）はい、これ。

花 …え？

女 どうぞ拭いて。お花さんに涙は似合わないわ。

男 涙？

花 ありがとう。 （受け取り、そのまま鼻をかむ）

娘 あ。

女 あなたが流しているのは涙なんかじ

花 ……返す。 （ハンカチを差し出す）

やない。それは、少し心が汗をかいて

娘 いらない。

いるだけ。

男 そんなの涙でもありません。ただの樹液じゃありませんか。

間

花 （ぼつりと）せめて蜜って言えよ、このやろう。

男 ええ？

女 あなた、何をしてらっしゃるんです？

男 …いえ、お財布を探して……いたはずなんです。

花 ヘンタイ。

男 ええ？

女 どうして服を脱いでいるんです？
男 ですから、お財布を探していたら
娘 ヘンタイ。

男 違いますよ。

女 あったんですか？

男 …何が？

女 お財布、見つけたんですか？

男 …見つかっていません。

太陽 ヘンシツシヤ。

男 はあ？

女 ちよつとそんな格好でこちらを向かないでください。

男 ああ、すみません。（いそいそと服を着だす）

女 まったく……なんだか興を冷ましてしまいましたね。どうです、一服。紅茶でも入れます
けど。

娘 飲みたい。

花 あ、私枯れちゃうんで。

太陽 あ、僕は飲む前に蒸発しちゃうんで。

女 あら、そう……じゃ、やめときましようか。

花 おーい。（弾みで原子爆弾で地面をたたいてしまう）え？

花 ……何これ？

娘 お、忘れてた。

太陽 ん？ 何か…書いてありませんか？

娘 そこで拾った。

女 何？ 何の話？

太陽 えーと、なんて書いてありますか…ちよつと拝見しても。

娘 どうぞ。

一同は娘が手にしている原子爆弾をまじまじと見つめている
その間に、男は服をすっかり着てしまっている

男 あれ？ ……皆さん、どうかしたんですか？

花 原子爆弾？

娘 （おうむ返しに） 原子爆弾？
男 え？
太陽 そうですね。紛れもなく原子爆弾ですね。
女 私、初めて見たわ、原爆って。（持っている携帯電話で画像を撮る）
男 何ですか？
太陽 いえね、こちらのお嬢さん。さっき、あなたのお財布を探していたときなんですけれど。
男 ええ。
太陽 原爆をね、拾われたみたいなんですよ。
男 ……は？
娘 これ。
太陽 ええ、こちらがそうです。
男 ……原爆？
女 あ、ごめんなさい。原爆って言うのは、原子爆弾の略のことです。
男 知ってます。
女 そうでしたか。
男 いや、しかし…
女 どうしました？
男 違いますか、それ。
太陽 何がです？
男 フライパンじゃありません？
花 だって、書いてありますよ。「原子爆弾」って。
太陽 ええ、はつきり書いてある。これ、原爆ですよ。
女 写真、送りますか？
男 書いてあるだけでしょ？
花 書いてあるからでしょう。
男 ……何ですって？
花 「原子爆弾」ってここにある以上、これ、原子爆弾以外の何者でもないんじゃないかしら？
男 いやいや、それ、原子爆弾以外の…フライパンでしかありえないでしょう？
娘 どうして？
男 どこからどう見てもフライパンの形をしているじゃありませんか。だったら、それはフライパンです。

女 あなた、好きなおっぱいってあります？

間

男 ……は？

女 あなた、好きなおっぱいの形は？

男 ……それと……（原子爆弾を指して）その……いったい何の関係が

女 聞いているのは私ですよ。あなた、どんなおっぱいの形が好きなんです？ こんなこと何度
も言わせないでください。

男 ええと……そうですね、あの…

女 ええ。

男 ……その、ふつくらとした…

娘 ふつくら？

男 ……おわん型の…

花 おわん型の？

男 ……私はおっぱいが大好きです。

男以外の全員の視線が、それぞれの胸の品定めをするように飛び交う
間

女 ごめんなさい。

娘 ごめんください。

花 ご期待に添えられませんで。

男 期待していません。

花 がびーん。

娘 期待はずれ。

太陽 あ、だったら僕、結構自信あるかも。

男 いりません。

太陽 がびーん。

娘 期待はずれ？

男 何がおっしゃりたいんです？

女 いいえ、今あなたがおっしゃったんです。

男 ……え？

女 ……あなたが好きなのは？

男 ……おわん型の……おっぱい？

女 （原子爆弾を取り上げて）では、こちらは？

男 ……フライパン型の……原爆？

一同 おおー。（拍手を送る）

花 （指笛を吹こうとするが）あ、鳴らね…。

太陽 何だ、話せばわかる方じゃありませんか。

男 え？

女 （原子爆弾をもって男に歩み寄りながら）たしかあなたが探していらっしゃったのは、黒い革財布でしたね？

男 ええ、そうですが、

女 これ、革でも財布でもありませんけれど、よろしければどうぞ。

男 はい？

女 黒いですよ。（押し付けるように原子爆弾を渡す）

男 あの、これを私にどうしろって言う

娘 んです？

女 ご自由になされば結構じゃありませんか。

女 なんか。どうせ拾ったものですから、どうなさろうと構いやしませんよ。

男 だってこれ、違うじゃありませんか。

女 あなた、この期に及んでまだそんな

ことをおっしゃるんですか？

男 いや、だってこれ、どう見てもフライ

女 あなた。

男 パン…。

女 そんなことだから、奥様に逃げられるんですよ。

男 どうして今、妻の話になるんです？

女 そうやって目先の情報ばかりに振り回されて、奥様のことを本質からきちんと見ちゃいなかったんじゃないやありません？

男 そんなこと、事情も知らない他人のあなたなんか言われたくありませんよ。そもそも、妻に逃げられたんじゃないやありません。私が家を追い出されたんです。

まあ、情けない。

だって本当なんです。元々は妻の方から惚れて押し付けてきて始まった関係なのに、仕事
がなくなつてからというもの、最近じゃすっかり小言ばかりで……冗談じゃありませんよ。
あなた、本当にヘーゲルさんを読まれたらいかがです？

ヘーゲルは関係ないでしょう。

まあ、あきれた。

何がです？

少し考えればわかる話じゃありませんか。どうして奥様があなたにつらく当たるのか。

どういうことです？

それもすべてこのヘーゲルさんが解決してくれています。

ヘーゲルさんが？

そう。あなたは少なくとも2つの奥様をおっしゃいました。つまり、小言を漏らし、あな
たにつらく当たる今の奥様と、あなたを慕つてやさしく接してくださったかつての奥様。

ええ、そうです。

この相反する奥様をアウフヘーベンして受け止めてみれば、答えはおのずと明らかになり
ます。

…アウフ……何です？

娘 ……ヘーゲルさん？

あなた、アウフヘーベンも知らない

花 知ってる？

んですか？

娘 知らん。

すみません。

花 私、知ってる。

アウフヘーベンというのは、これは
ヘーゲルさんの弁証法において極めて
有効な思索の方法で、つまり、矛盾し、
対立する2つのテーゼ、すなわちテー
ゼとアンチテーゼを設定し、これを互
いに否定させるとともに保存させるこ
とにより、より高次のテーゼであるジ
ンテーゼを獲得しようとする行為のこ
とです。わかりますね？

太陽 だってほら、僕46億歳ですから。

花 知ってるの？

太陽 マジで？

花 ジジイ？

娘 私、2歳なんだけど。

花 ガキ？

娘 なんだとクソガキ。

花

わかりやすく言うと、相反する2つの意見があつたときには、それらをむやみに戦わせる
だけでなく、その両方の意見を包括するような上等な意見を作り出しましょう、という考え
方のことです。

それは……いいとこどり、ということでしょうか？

花 そのとおり。

女 違います。

花 違うの？

男 すいません。

娘 知らんでしょう？

女 わかりました。では簡単な例で考えてみましょうか。

男 いえ、私は結構、

女 結構ですか、そうですか。そこまでおっしゃるんじや仕方ありません。

男 あのね、

女 (さえぎって) 例えば。

男 ……はい。

娘・花 例えば？

女 男と女。これは明確に対立し得るテーゼであるということが出来ます。わかりますか？

男 ええ、それはまあ。

女 では、この相対する2つについて、さっそくアウフヘーベンしてください。

男 はい？

女 男と女。これを同時に否定しつつも包括するものを考えてみればいいんです。

男 えーと…つまり…

女 簡単ですよ。

花 男と…女…

男 どっちでもなく、それでいてどっちでもあるような、ということでしょうか？

女 そうそう。男とも女とも断じること

花 私、どっちもあるんだけど。

はできないし、しかして男でも女でも

娘 ほうほう。

あるという…

花 え、じゃあ答え、「私」。

男 ……わかりました。答えは「人」です。これなら男と女とを分けることはできないし、かつ、男も女も、すべて人です。

女 やっぱりあなた、話せばわかる方です。
花 おお、なるほど。

男 やあ、ありがとうございます。

娘 知らんでしょう？

女 さ、例題が終わったところで本題に入りましょう。

男 はい。

女 では、あなたにやさしい昔の奥様と、あなたに厳しい今の奥様をさっそくアウフヘーベンしてみましよう。すると、きっと奥様の真の姿が見えてくるはずです。

男 なるほど。えーと：

花 えーと：

娘 知らんでしょう？

花 知らん。

男 すみません。これはすっかりわかりません：やはり、私が悪かったんでしょうか。

女 ご心配なさらずとも結構です。すべてヘーゲルさんが解決してくれます。

男 と、言うと？

女 つまり、愛です。

娘・花 愛？

男 いえ、直子です。

女 お名前のことじゃありません。

男 え？

女 ラブの方です。

男 ラブ？

女 あなたに対する奥様の態度、その変遷……ヘーゲルさんを通してみれば、これらはすべて愛で説明ができます。

男 と、言いますと？

女 あなたにやさしく可愛らしい奥様が、あなたへの愛にあふれていることはもちろんですが、はたしてあなたに厳しい奥様だって、その元をたどればすべてあなたに対する愛なんです。どうしてそうなるんでしょう？

女 だってそうじゃありませんか。愛の反対は無関心ですよ。もし奥様が本当に愛想を尽くしきっていたとすれば、無視されるようなことはあっても、わざわざあなたにチクチクとする必要なんてありません。

男 はあ：なるほど。

女 ですから奥様は、あなたに対して乾坤一擲、奮起を促すつもりで、そういった心にもない言葉を投げつけていたんじゃないでしょうか。

男 ：では、私と妻は：まだやり直せるチャンスはある、と？

女 そのとおりです。

男 私、妻から1日5回は「死ね」って言われるんですが、それは逆に、がんばれ、ってことです。

花 ウソ？

太陽 それは「死ね」ってことでは？

男 仕事がなくなつて昼まで寝ていた私に冷蔵庫を投げつけたのも、それは逆に、
女 がんばれ、つてことです。

花 だから違う。

太陽 それは「死ね」つてことです。

男 そうだったんですね。

花 真に受けちゃダメ。

女 さ、今からでも遅くはありません。奥様に誠心誠意謝つて、心を新たにして仕事をお探し
になることです。そうすればきっと、奥様だってあなたを許してくれるに違いありません。

太陽 それはないと思います。

男 ありがとうございます。

女 （ヘーゲルをかざして）お礼を言うならヘーゲルさんにも。

男 ヘーゲルさん、ありがとうございます。

女 （腹話術の要領で）いえいえ、どういたしまして。

娘 へたくそ。

男 私、なんだか目が覚めたような心持ちがします。

女 さ、いつまでもこうしてはいけません。

男 はい。

女 タイムイズゴールド。あなたは一刻も早く奥様のところへ向かうべきです。

男 タイムイズゴールド…それを言うなら、タイムイズマネーではありませんか？ それでは、

「時は金（きん）なり」だ。

女 私、かねてより金本位制の復活を主張しています。

男 えー？

女 さあ、お行きなさい。今は一刻も無駄にしてはなりません。

男 そうでした。皆さん、本当にありがとうございます。娘さんにお花さん。太陽さんも、
女 本当にお世話になりました。

女 私は？

男 男は勢いよく家に向かって走り出す

そこに現れた警官と出会い頭にぶつかってしまう

警官 あああ…（転げてしまう）

男 あああ…（同じく転げてしまう）

女 あらら。

警官 あいたたたた……

男 ああ、すみません。ちょっと急いでいたもので。

警官 いえ、あの、こちらこそ申し訳ありません。

男 あの、お怪我は？

警官 大丈夫です。お宅様こそお怪我は？

男 おや、警察の方ですか。

警官 ええ、私、《自由》と申します。 ※ 初演時は俳優の本名

男 ちようど良かった。（原子爆弾を差し出して）あの、これなんですけれど。

警官 はい、どうしました？

男 これ、拾い物なんですけれど、預かっていただけますでしょうか？

警官 ああ、拾得物ですね。結構ですが、これはどちらで？

男 （適当に）あ、もうここです。すぐそこ。

警官 どこですか？

男 お願いできますか？

警官 …ええ、ま、承りますが。

男 ありがとうございます。これ、原爆らしいんですが。

警官 （受け取って）原爆？

男 ええ、フライパン型の。ですので、あの、もし落とした方がいらっしやなくても、私、とうてい引き取れませんので、どうぞ警察の方で処分してください。

警官 ……原爆？

男 あの、では私、急いでおりますからこれで。（走り出す）

警官 いや、あの…え？

男 はそのまま去ってしまう

花と太陽は、警官が現れて以来、すっかり生氣を失っている

警官 あ、これはどうも。

女 ご苦勞様です。

娘 ご苦勞様です。

警官 今の方は……ずいぶんお急ぎのようでしたが、お知り合いですか？

女 （首を横に振りながら）いいえ、まったく存じ上げません。

警官 そうでしたか。…これ、原爆らしいんですが、こちらについては？

女 （首を縦に振りながら）ええ、まったく存じ上げません。

警官 なるほど……困ったな。

女 なにか、ご用ですか？

警官 そうだ。しまった。さっきの人にも聞けばよかった。

女 何です？

警官 ええ、実はですね。このあたりでお財布を拾ったという届け出がありましたもので、それで落とした方でもいらつしやらないかと。

女 お財布？ どんな？

警官 ええ、黒い革の、たいそうなお財布なんですが、まあ中身もずいぶんたいそうでした。

女 ええ。

警官 40万円以上入ってるんです。しかし、落としたという届けはありませんし……そういう、お財布を落として困っている方にお心当たりはありませんか？

女 いえ、残念ながら。

警官 そうですか。…お嬢さんも？

娘 ……………ん？（自分のことを指さす）

警官 ええ、もちろん。

女 （目を見開いて娘を見ている）

娘 （驚いたような、困ったような様子で）んん…。

警官 （女に）さっきの方、何かおっしゃっていませんでしたか？

女 ……いえ、特別なことは何も。

警官 わかりました。では、もし心当たりなどありましたら、交番までご一報ください。

女 承知いたしました。どうもご苦勞様です。

警官 では、私はこれで。失礼します。

娘 タワシ…。

警官が敬礼のうえ、立ち去ろうとしたところ、空からひとつ、タワシが落ちてくる

この後、断続的にタワシが降り、その都度娘は「タワシ」とつぶやく

警官 おや、予報ではタワシが降るのは午後から、ということだったんですが。

女 天気予報なんて、あてになるものじゃありませんよ。

警官 まあ、それもそうですが。

女 つい先ほどだって、夜明けの通りタワシだって降りましたし。

警官 あ、そうなんですか。

女 まだ何か？

警官 …いえ、すみません。では、私はこれで。

女 ええ。

警官はそのまま原爆をもって立ち去る

沈黙

おもむろに女はヘーゲルを投げ捨て、新たにワイトゲンシュタインを取り出して読みだす
ときどきに落ちるタワシと娘の声が響く

一度だけ、娘の「タワシ」が違う言葉を発しても良い

【二幕】

太陽は、ゆっくりと夕日の位置に向かって移動している

花

種を明かせば……朝日が明るいつて
いうのは正しくない。もちろん、昼間
のそれが一番明るい。明け方白んだ空
にあのまん丸が飛び込んで、目を焼き
始めるから眩んでしまう。だから夕日
が暗い道理も立つ。あの昼間に睨めば
つぶれそうなのが、ゆっくりとその姿
を隠してしまうだけのものだから……。
どちらもおんなじ暗い太陽。要は、認
識の違いだけなのだ。

太陽

まあ、僕は太陽ですから前とか後ろ
とかがある訳ではないんですが、仮に
前が朝日だとすれば、下は昼で後ろは
夕方な訳で……。つまり、僕は朝日のよ
うでも夕日のようでもあるって、かとい
ってそうでもなくて、そんな僕のあ
りか、いや、あかりを勝手に決めてい
ただきたくはない訳で……。そんなこん
なでお母さん。僕は今日も元気に核融
合反応を繰り返しながら生きている訳
で……。さて、夕方です。

いつしかタワシは降りやんでいる

夕方

女はベンチに寝転がり、夢中でワイトゲンシュタインを読んでいる

娘は浜にタワシを植えている

そうした浜の風景を夕日の位置から太陽が照らしている

たまに風が花を撫でてゆらしているが、その風（「そよ」の声）はとても弱い

花
（大きく風に当たり）そよそよそよそよ……

沈黙

花
ねえ。

娘
うん？

花
それ、なに？

娘
んーとね……農業。

花
…農業？

娘
植えてるの。

花
…ふーん……育つといいね。

娘
うん。

太陽
芽が出てきたら教えてください。光合成、させていただきますから。

花
あ、いたの？

太陽
そりやいますよ。まだ夕方なんですから。

花
だって、顔見えないし。

太陽
それはだから、夕方だから。

花
…明日になったらまた会える？

太陽
……ま、曇ってなければ。

花
あのね、太陽さん。私、

太陽
およしなさい。

花
え？

太陽
僕を好きになってはいけない。…たとえ好きになっても、それを口に出してはいけない。

花　でもね、

太陽　僕に惚れると…やけどするぜ。

花　見えないけどかつこいい。

太陽　なぜなら僕は、

花　なぜならあなたは、

太陽・花　太陽だからね。

女　うるさい。

太陽・花　はい。

沈黙

花　（大きく風に当たり）そよそよそよそよ……

男がぶつぶつと言いながら現れる

男　別れた……別れた……別れた……別れた……

そのまま、男は浜の真ん中で立ち止まる

男　（ため息をつく）

花　そよそよそよ……そよ？

女　……（気づいて起き上がり）あら？

男　…どうも。

女　あなた、どうされたんです？

男　ええ、女房と正式に別れてきました。

花　あら？

太陽　でしょうね。

女　と、言いますと？

男　私、あの後急いで家に向かいました。すると、妻は満面の笑顔で私を迎えてくれたんです。

女　ええ。

男　あなたが帰ってくるのを待っていました、と。

女　そうでしょう。そうでしょう。

男 それで、さっそく離婚届に判を押してくれ、と言われまして……押してきました。
花 あらら。

男 今ごろはもう、すっかり他人です。法的に。

女 あなた、ちゃんと謝りました？

男 もちろんです。土下座だってしましたし、仕事も探すと言って、やり直したいと伝えました。それに……あなたから伺ったヘーゲルさんのアウフヘーベン、

女 アウフヘーベン。

男 そう、

花 アウフヘーベン

男 の話だって差し上げたんですが……
どうにも……。 太陽 お？ 久しぶり。

女 奥様はなんとおっしゃったんです？

男 私に死ねって言ったのは、本当に死ねっていうことで……冷蔵庫を投げつけたときだって、まあ、捕まっても殺せるんだったらまあいいか、と……そう思っただけだって……。

女 まあ……。

花 いやだ、バカみたい。

男 そんなこと言われたら、私、もうどうしようもなくって。

女 それは……

太陽 ご愁傷様です。

男 あなたのヘーゲルさんも、何の役にも立たなかった、ってことですね。

女 ……ヘーゲルなんか頼るからよ。

男 え？ だって、それはあなたが

女 (ワイトゲンシュタインを掲げて) 今、私はワイトゲンシュタインを読んでいます。

男 ……ワイトゲン？

女 あなた、ワイトゲンシュタインさん知らないんですか？

男 すみません。

女 仕方ありません。では、ワイトゲンシュタインとは何か……いいですか、

男 (遮って) いえ、本当に……もう、結構です。

女 ……あ、そう。(本を置く)

太陽 じゃあ、これからどうされるんです？

男 ええ、どうしたらいいんでしょうか……どこにも行くあてはありませんし、かといってお

女 金もないのでどこにも行けませんし。……とりあえず、あなたがおつしやつた、ええ。

男 ここはとても良いところだ、というのを思い出して……戻ってきてしまいました。

花 (長く、高く) そよそよそよそよ……

男 ……私、こちらにいさせていただいてもよろしいですかね？

女 ……結構じゃないかしら……だって、この浜はとても良いところなんですから。(太陽に) どうかしら？

太陽 ……結構、じゃありませんか？

花 ……結構、だと思います。

男 ありがとうございます。

女 それじゃおひとつ、いかがです？(煙草を取り出す)

男 ……え？

女 お近づきのしるし、って訳でもありませんけれど、よろしければ。……あなた、吸われる方かしら？

男 いや、それは、

女 あ、ごめんなさい。

男 その、昔は吸っていたんですが、

女 ……ええ。

男 妻が苦手だったものですから、もう何年も……

女 ……そう。(自分で吸い出す)

男 せつかくですが……遠慮しておきます。

女 ……あれ？

男 (娘に気づいて) おや……お嬢さんは何を？

花 農業ですって。

男 ……農業？

花 だよね？

娘 うん。

太陽 春には芽が出ますかね？

男 ……ヤシの？

太陽 いいえ、タワシの。

女 ねえ、ちよっとお伺いしてもいいかしら？

男 ……どうしました？

女 あなた、煙草はやめられたんですよね。

男 ええ、妻が嫌いなものだから。

女 そしてあなた、ついさつきその妻……正確に言う元妻と、別れてきたんですよね？

男 申し上げたとおりです。

女 だったらあなたは……いったい何のために今、煙草をやめてらっしゃるんです？

問

男はあたりを見渡してみたりしている

男 あの、お煙草いただいても？

女 どうぞ。

男 すみません。（受け取る）

女 いいえ。

男 では、私も失礼して。

男は煙草に火を点けようとするが、どうやらガス切れで火が起こせないようだ

男 ……つかないな。

女 じゃ、こちらどうぞ。

女 え？

女は自らが咥えた煙草を示して差し出している

男 ……それじゃあ。

男は女の煙草から直接火を貰う

女はその後、自分の煙草の火を消して、その灰皿を男の下へ差し出す

女 どうぞ…。

男 ……どうも……ありがとうございます。

女は再びウイトゲンシュタインを手に取り、読み始める

男は煙草を燻らしながら海の方を見ている

そのうち、女はワイトゲンシュタインから目を離し、同じように海の方を見やる

花 (小さく) そよそよそよそよ……

沈黙

男 なんだか、落ち着きませんね。

女 そうかしら。

男 ええ。やはり…私にはここにいる理由が少ないもので、

女 だったら、結婚でもしてみましようか？

男 え？

女 私と……あなたと。

男 …いや、しかし、

女 さつき、キスしましたでしょう？

男 …………… (煙草を見て) ああ。

女 ね？

男 …考えときます。

女 つれない方。

娘 タワシ…。

娘は埋めようとして手に持っていたタワシをやおらに投げ捨てる
その後、娘はこれまで植えてきたタワシを掘り起こしては捨てていく
原子爆弾を手にした警官が現れる

警官 あのー、すみません。

女 …あら。

男 え？

警官 (男に) あ、あなた。ちょうど良かった。あの…ちょっとよろしいですか？

男 はい… (煙草を消して) …ええ、何でしょう。

警官 あの、先ほどお預かりした、これなんですけど。

男 ああ、原爆ですか、これが何か？

警官 その、原爆とおっしゃられていた、これなんです。

男 ……ええ。

警官 お返しします。

男 え？

警官 ええ、ですからお返しをさせていただきたい、と。

男 いや、だって……私だって拾ったものですから。持ち主がないのであれば、引き取ってくださいよ。

警官 ないんですよ。

男 ……何がです？

警官 これ、一度持ち帰って、上長とも相談したんです。

男 ええ。

警官 原爆なんて、日本にはないんです。

男 ……いや、だって現に

警官 もしこれが原爆であって、それをあなたが拾得されたということであれば、もちろん調査しなくちゃいけませんよね？　これが、本当に原爆であるかどうか。

男 知りませんが、必要なら調査をすればいいじゃありませんか。

警官 非核三原則って、ご存知ですか？

男 ……はい？

警官 ですから、原爆なんてものは日本には存在しないんです。

男 さつきからあなた、何をおっしゃってるんですか？

警官 何も申し上げてはいません。

男 …………何ですって？

警官 そもそも原爆を拾うなんてことないんです。ですからこれ、処分することもできませんし、したがって、それを届け出たあなたにお返しするしかできないんです。おわかりでしょう？

男 わかる訳がないじゃありませんか。だったら…これは何だって言うんです？

警官 わかりません。

男 じゃああなたは、私に何をお返しされようとしてるんです。

警官 何もお返しはしないんです。

男 ここにあるじゃありませんか、原爆が。

警官 あえて申し上げれば、正当防衛なんです、これは。

娘は埋められたタワシを掘り起こしながら、いつのまにか浜の先までたどり着いている最後のタワシをじっと見据えながら、タワシの先にある海の方へと顔を向けている

男 …… 正当？

警官 はい。つまり、出された拳に反射的に拳を返す、というような……。私には、これが何であるか、語り得ることばを持つていないんです。そして、語り得ぬものについて我々は、

娘 （「黙れ」の意味で遠く海に向かい） シー……………

娘の言葉が続いている間に、浜にいる全員は海の方をまっすぐに向いている

花 （娘の長い言葉が切れるのを待ち、ささやくように） バハマ。

娘 （タワシを高く掲げて覗き込むように） タワシと、わたシー……………

花 （娘に重ねて、高く） シー……………

爆発のように明るい閃光に浜の一带が包まれる

花 （娘の言葉が切れた後、強く） バハマ！

閃光が消え行く中、花を除いた全員の首がごろりと転げる

幕

【参考文献】

『方法序説』ルネ・デカルト

『論理哲学論考』ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン